

ロバート・リンド

—マルチ・メソッド調査の先駆者—

園部雅久（上智大学総合人間科学部教授）

「大学で社会学を学んだ経験をお持ちの方であれば、リンド夫妻の『ミドルタウン』 *Middletown: A Study in Contemporary American Culture* (New York: Harcourt, Brace, 1929) と、『変貌期のミドルタウン』 *Middletown in Transition: A Study of Cultural Conflict* (New York, Harcourt, Brace, 1937) という二冊の著書のことは必ず講義でお聞きになっているはずである」とは、この2冊の著書の訳者である今は亡き中村八郎の訳者解説の書き出しの文章である。今日、リンド夫妻の仕事が、どれほど社会学一般の講義のなかで取り上げられているかは定かではないが、少なくとも社会調査法の授業のなかでは、今でも言及されることが多いのではないかと思う。

このリンド夫妻とは、夫ロバート・リンドとその妻ヘレン・リンドの夫妻である。ロバート・リンドは、1892年アメリカ、インディアナ州の田舎町ニュー・オルバニーで生まれ、神学校に通い、聖職者になることをめざしていた。神学校を優秀な成績で卒業した30歳の年に、社会宗教調査研究所からスモール・シティ・スタディ（小都市研究）のプロジェクトの主任に任命される。これがリンドとミドルタウン研究との直接の出会いとなる。研究所の意図は、アメリカのプロテスタント教会を強化し、統一するための科学的宗教調査を実施することであったが、リンドは教会のための調査には飽き足らず、調査の目的は、新しいタイプの調査を生み出すことであると主張した。リンドのめざす新しいタイプの調査とは、正確に何がコミュニティの精神生活であるかを探求するものであり、新しい精神的衝動がどのようにして起こるのか、どんな主体がそれを喚起し育成するのか、といったコミュニティ生活のダイナミックな側面に焦点を当てるものであった。

この目的を達成するために、リンドが選んだ調

査対象地が当時人口3万8,000人のインディアナ州マンシー、仮称ミドルタウンであった。1924年1月、妻ヘレンが基礎調査に合流し、18ヵ月間の本格的な調査研究が開始された。この研究のためにリンドがとった方法は、基本的に文化人類学的なものであった。それは異文化の世界からやってきた訪問者のように、ミドルタウンを可能なかぎり局外者の立場で観察し記述することであった。1890年代の古き良き中西部の小都市の生活が、1920年代にどのような変化を被っているのか。それが社会の階層分化や人々の習慣・行動・意識の変化にどのように結びついているのか、を実証的・経験的に明らかにすることが彼らの基本的な関心であった。ここに社会変動、産業化や都市化について、社会階層の変化を媒介にして人々の習慣・行動や意識を結びつけて分析する枠組みができあがった。それは大恐慌の地域生活への影響の把握として、10年後の継続調査に引き継がれる。その成果が『変貌期のミドルタウン』である。

リンドは、確かにモノグラフ的方法を用いて、1つの地域社会（コミュニティ）を総合的・全体的に捉え、その変容を生き生きと記述することに成功したことに間違いはないが、そこで用いられている調査方法は、質的な参与観察法を中心に、それに加えて、量的な質問紙調査、インタビュー調査、文献資料分析、統計分析といった多岐にわたる方法が組み合わせられている。それは、今日いうマルチ・メソッドの方法の典型になっている。リンドは、モノグラフ調査の先駆者であるとともにマルチ・メソッド調査の先駆者でもあった。



磯村 英一

倉沢 進 (東京都立大学名誉教授)

1986年NHK朝のドラマ『はね駒』の主人公は、東北相馬の出身の女性おりんである。仙台の女学校で時代の新しい風を吸収したおりんは東北農村の桎梏にぶつかり、名前のおり「はね駒」のごとく活動する。上京したおりんは女性解放に取り組む青鞥社と関わり、日本初の女性新聞記者となる。報知新聞の婦人記者おりんは、幼い子の手を引いて取材に奔走し、ルビ付き記者、子連れ記者の異名をとる。この母親に手を引かれ取材に同行した少年こそ、後の磯村英一その人である。

キリスト教的ヒューマニズム、女性・被災者・差別される者への共感、平等、人権、反戦、権力への反骨精神という母子共通の態度は、この稀有な共同体験が紡ぎ出したエトスというべきだろう。

日本の底辺社会の実態調査には、横山源之助の『日本の下層社会』をはじめ優れたジャーナリスト的研究者の業績があるが、それを磯村に伝達したのは、同様の背景をもつ1人、草間八十雄であった。草間はいくつかの新聞社に籍を置いて、水上労働者、不良児などの調査をまとめた後、内務省細民調査事務嘱託を経て、東京市主事として社会局保護課に勤務していた。同課に配属された磯村を上司草間は浅草寺に案内した。当時浅草寺の床下にはハンセン病患者が保護されていたが、草間は彼らに「今後はこの男がお前たちの担当だ」と紹介し、どよめいた人々の数人が磯村に握手を求めた。役所に戻った草間は「お前怖いか、そう思うならもううつっているぞ」。手荒であるが、見事な新人教育といえようか(磯村直接の話)。

草間の指導のもと磯村によって進められた社会局の実態調査は、資料的価値からいっても第一級の論文集である。浮浪者、乞食など時の社会の底辺を構成する人々の実態調査であった。やがてそれは戦後の葵部落、どや街調査に引き継がれる。

これら一連の東京の下層社会に関する調査は、

磯村の全業績のなかでも白眉・核心ともいえる研究・実践領域を構成している。その1つに、児童連行の乞食の調査がある。実の子だったり、貰いをよくするために借り子を雇った子連れの乞食である。かつての子連れ婦人記者の連れ子は、どのような思いで調査対象に臨んだのだろうか。それは底辺社会に対する満腔の同情と不平等に対する怒りによって支えられたことは間違いなからう。しかし調査された乞食やどや街の住民からみた磯村は高名な学者であり、この紳士が稀有の理解者・同情者ではあっても、本来自分たちの仲間ではあり得ないことを肌で感じていたのではないか。

磯村の業績を成立時代順にみると人間磯村の大きな成長がみとれる。東京市時代の報告書類からは冷たい専門家、官僚の目が感じられる。『都市社会学』(1953)や『社会病理学』(1954)になると、底辺社会の人々との連帯とまではいわずとも、相互理解の暖かさが感じられるようになる。

そこにはマージナルマン磯村の努力が隠されている。どや街へ行き食堂に入るとメニューの中から一番安い料理を注文する。隣の卓に座って1ランク上の注文をした先客は多少の優越感をもって警戒心を解く。ここから磯村の調査は始まる。これは磯村から聞いた話である。吉原のボスS氏との交友や葵部落のリーダーたちとの交流は、こうした磯村の行動様式に支えられたのであろう。

もちろんマージナルマンは、アンヴィバレントな存在。学界と官界、中流上層と底辺層、いずれの規範にも束縛されず、それらを相対化して独自の視座構造の高みを形成する可能性がそれである。晩年の端倪すべからざる論点を提起し行動する知識人磯村は、このマージナルマンの強みを発揮したといえよう。そして磯村をこの高みに引き上げたのは、底辺社会の人々との交流と相互理解の自信だったのではないか。